

## 第Ⅲ章 総括

ここでは本遺跡の縄文時代の調査成果について纏め、総括としたい。

**土器** 桶ノ口遺跡は船元式系土器や春日式土器前半期、上水流タイプが出土土器の中心を成すが、宮之迫3、4式土器、西和田式土器、中津式土器も少量ではあるが出土しており、断続的ではあろうが後期初頭まで集落が営まれていたと考えられる。また、取り上げが不可能であった土器が多数存在するという問題はあるが、宮之迫4式以降の土器は確認されておらず、西和田式土器、中津式土器と包含層内ではあるものの共伴していることは注目される。

宮崎県域では、縄文時代中期は土器の出土量が少ない時期であるが、船元式、春日式段階になると、下耳切第3遺跡、天神河内第1遺跡のような出土量が多い遺跡が出現することから、散発的ながら定住集落が形成されたと想定されている（金丸2010）。桶ノ口遺跡も、包含層を掘削したのは僅か65m<sup>2</sup>であることを鑑みると、このような定住集落が近接地を含め営まれている可能性がある。

**石器** 石器では石刀の出土と石錘の多量出土が注目される。

石刀は十分な検討ができなかったが、同じ頁岩製の未成品と思われる資料も出土しており、当地で製作された可能性もある。

石錘は総数92点出土しており、石器総数の20%近くを占める。紙幅の都合から表やグラフで示すことができないが、欠損部分が多い資料を除いて重量の分布状況を確認した。分布の中心は、20g～80g、110g～150gに見られるが、200g以上の資料も13点存在する。宮崎県高鍋町下耳切第3遺跡では、縄文時代中期前葉から中葉に属する386点の石錘が出土し、10g～246gの幅の中で10～90gに分布の中心があることが指摘されている。両者を比較すると、桶ノ口遺跡の方が最大重量も分布の中心も値が大きく、総体的に石錘の重量が重い傾向にある。下耳切第3遺跡は小丸川中～下流域に所在し、桶ノ口遺跡は一つ瀬川下流域～河口域に所在する。この様な錘具重量と地理的分布の関係性は、資料数が多い縄文時代後、晩期の資料を用いて藤木氏によって指摘されており（藤木2003）、下流域～河口域に所在する桶ノ口遺跡では、有溝石錘が見られる錘具種類の増加、分布中心重量の増加、重量に複数の中心が見られるという特徴が表れている。

以上のように、今回の調査では、県内では希薄であった、微高地上における縄文時代中期中葉～後期初頭の調査成果が得られた。台地上の大規模な調査と比較すると、僅かな調査面積であり、遺跡の一端が明らかになったという状況であるが、当該期の基礎資料が得られたという点では重要な調査成果と言える。

### 引用文献

金丸武司 2010 「宮崎県における縄文時代中期土器の様相」『九州の縄文時代中期土器を考える』九州縄文研究会。

藤木 聰 2003 「宮崎県域の錘具の変遷と分布」『先史学・考古学論究』IV、龍田考古会。

※その他参考文献、報告書に関しては紙幅の都合上割愛させていただいた。